

2023年3月10日

～毎月10日は人権を考える日～

☆令和4年度差別をなくする市民の集いで、
ご本人に朗読していただきました☆

僕の体験

西条市立河北中学校 2年 垂水 新太

僕は小学生のころから、人権について学習してきました。内容は、日常の人間関係の中で生まれる身近な差別に始まり、学年が進むにつれて、世界中で問題となっている様々な差別について学ぶようになりました。僕には、実際に起きた出来事がきっかけで、自分の心が大きく変わった経験があります。

その日僕は、学校から一人で帰宅していました。僕の通学路には、障がい者支援施設があります。そのため、施設の人が散歩している姿をよく見かけます。僕の住む地域では、子どもでも大人でも、道で出会った人には明るい声で挨拶する習慣があります。僕もその習慣はとても良いことだと思っていたため、誰にでも同じように挨拶するようにしていました。しかし、中には知らないふりをする人もいます。その人は、よく見かけてすれ違うのですが、一度も挨拶を返してくれたことがありませんでした。僕はどうしてだろう、と疑問に思っていたし、少し寂しい気持ちもしていました。会うたびに挨拶を続けました。

ある日のことです。僕はいつも通り通学路を帰り、その人に挨拶をしようとした瞬間、その人は僕の後ろを指して「アー。」と大きな声で叫んだのです。最初は何を言っているのかわからず驚きました。指さす方を見てみると、僕のハンカチが落ちていました。僕はすぐに何が起こったのか理解しました。そして、心がふわっとオレンジ色に染まり、温かくなりました。言葉が話せないのか、人に話しかけるのがとても苦手なのか、分かりませんが、その人は何とかして僕にハンカチを落としたことを伝えようとしたのでしょうか。僕はこの時、この人はいつも僕が挨拶をしても無視する、言葉が話せない障がい者なのかと、知らず知らずのうちに差別していたことに気がきました。そして、そんな自分の心を恥ずかしく思い、とても自分に腹が立ちました。差別はいけないと頭では理解していたつもりでも、自分の中に人を差別したり、勝手に決め付けたりする心があったのです。僕はこの事実ショックを受け、落ち込みました。

この体験をきっかけに、僕は「あの人は〇〇な人だ。あの人の友達はコロナに感染した。」など、「あの人は…」という考え方、言い方をやめよう決意しました。考えてみれば、誰もが同じ人間です。幸せに生活する権利を持っています。その考えがさらに深まったのが、2021年のパラリンピックを見た時でした。今までごく普通に元気に生活していた人が、不慮の事故で大けがをしたり、生まれつき障がいや病気をもっていたりしている人などが、実に生き生きと競技に取り組んでいました。中でも

一番印象に残っているのがラグビーです。手を失った人、足を失った人、全身大やけどを負った人、ほとんど目が見えない人、全ての人たちが、必死でボールを追いかけていました。どの人も、人の目を一切気にすることなく、懸命にスポーツを楽しんでいました。僕は、その姿に心から感動し、さわやかな気持ちでいっぱいになりました。

そのことがきっかけで、僕は人権に対する意識が変わりました。それまでの僕は、差別はいけない、と学んでいても、表面上分かったつもりでいただけでした。なぜ人は差別するのか、そんな風に見て、本当に幸せな人生が送れるのか、どうすればこの世から、差別がなくなるのだろう…と考え、もっと人権問題について勉強したいと思うようになりました。

僕はまだまだ、学びの途中ですが、人の心になぜ差別心が生まれるのか、少し分かる気がします。なぜなら、人の心は弱いと思うからです。世の中は様々な考え方の人がいて、どうしても何かを決めなければならない時、多数派が力を持ち、少数派は自身の狭い思いをする場面はよくみかけます。そんな世の中においては、多数派に属するふりをして自分を守ることも仕方がないことかもしれません。人と違うことは個性であると、昔に比べると多様性が認められる時代になってきていますが、その考えが世に受け入れられるようになるまでどれだけの多くの闘いがあったことでしょうか。自分の本来の姿を明らかにするカミングアウトという行為も、珍しくなくなりました。自分は自分であるということ、堂々と主張できると、どれほどの人が救われ伸び伸びと自分の人生を生きられることでしょうか。しかし、自分らしく生きるということは、本当は当たり前のことのように思えてなりません。世の中の常識と呼ばれるものと、少し違っていたら、人から変な目で見られたり、排斥されたりするのは、まさに人の心の弱さや知らないものへの恐れによるものだと思います。そんな当たり前のことが、もっともっと認められる世の中にしていくためにも、僕たちはより深く広く学び、多様性について学ぶ必要があります。自分の中の差別心に気付き、間違った考えを正していけるよう、誰もが努力することで、より住みやすい、幸せな世の中になっていくと僕は信じます。

このように、僕は自分の差別心に気付き、それを壊していくきっかけになるような良い体験をしました。ほんの小さな出来事でしたが、あの日僕がハンカチを落としたと伝えてくれようとした人に、直接会って、もう一度お礼が言いたいです。そして、これから差別を見つけた時、正しい判断ができるように、また、間違った考えに注意ができる自信と勇気を持った大人になっていきたいです。

ハンカチを落としたことがきっかけで、自らの差別心に気が付きます。そして、「恥ずかしく思い、とても自分に腹が立ちました。」とつぶっています。垂水新太さんは素晴らしい人権感覚をもっている中学生です。

自らの差別心に気付き、それを壊していく決意、差別を見つけた時、差別をなくしていくための行動を起こす勇氣、どちらも私たち一人ひとりがもっていなければならないものです。そのことをこの作文は教えてくれています。

西条市人権教育協議会 西条市人権擁護課